大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

公園から見た水都大阪

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-03-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 武田, 重昭 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/00017596

特集●公園から都市をみる

公園から見た水都大阪

武田重昭（たけだしげあき）
（大阪府立大学大学院生命環境科学研究科准教授）

コロナ禍での新しいパブリックライフ

二〇二〇年春の中之島公園は、これまでとはまったく違う風景だった。

春はいつも変化を連れてやってくる。気温や雨量の変化に富む日本は、四季による自然の移ろいが際立って美しく、そのリズムにあわせて歴史的・文化的な営みが重ねられてきた。とくに春は新しい暮らしへの期待が感じられる季節である。しかし、この年の春がもたらした変化は、日々の暮らしを不穏の渦中に陥れるものだった。花が美しく咲き誇るほど、私たちの心のダメージは大きくなった。自粛生活が強いられ、特に都市では人々の交流というその本質的な魅力が損なわれた。しかし一方では、新しい魅力の芽生えを感じることもできた。

公園の風景は、それを支える自然基盤とその上に人が築いた設（しつら）え、さらにはそれらを利用する人々の姿そのものが重要な構成要素となって、その総体が目に見えている。公園では、多人数での集合を避けながらも散歩や運動をはじめ、食事を楽しんだり、パソコンに向かったり、青空のもとで麻雀を楽しむ人たちまでもが都市の新しい風景として現れた。これらは抑圧された生活の中で欲求を満たそうとする行動だが、世情のことを少し脇に置いて、目の前の風景だけを切り取ってみると、公園という都市の舞台がずいぶんとうまく使いこなされているように見ることもできる。パンデミックの中でも、思い思いに過ごす人たちが互いの距離を保ちつつ離散的に集合する風景に、新しい公園

の価値を見出すことができる。離散は疎外ではなく、むしろ離れたものの間に意味を生みだす。身体的な関わりを持つことはなくとも、同じ時間と空間を共有することによって他者と交流するという、新しいパブリックライフの風景が生まれている。

「協働」から「共同」へ

昨今の公園では、賑わいを生み出すことばかりが目指され、官民による協働が重視されてきた。「協働」とは、「同じ目的のために、力をあわせて働くこと」であり、明確な能力や技術をもった個が、それを使って同じ目的のために一緒に取り組むことを指す。これに対して「共同」とは、「ふたり以上の人がいっしょに何かをすることや使うこと」であり、特に共通の目的があるわけではなく、必ずしも互いの能力や技術を求め合っているわけではない。共同浴場とは、皆が一緒に使う風呂であって、そこでは力をあわせて共通のミッションを達成することが求められているわけではない。公園も本来このような共同の場所なのではないだろうか。

江戸時代までさかのぼらなくとも、つい近年まで、日本の社会には共同体が成立していた。都市の発展は一方でこの共同体を破壊し、皆が一緒に使う「共同空間」を官民が同じ目的をもって働くための「協働空間」へと変えてきた。しかしコロナ禍は、個の生活が屋外ににじみ出ざるをえない状況を生み、協働以前に共同の空間が不可欠であることを明確にした。公園は現代に残された最後の共同空間である。共同のための暗黙の配慮や不文律に従う行動にこそ、その社会の持つ文化的な度量が現れる。コロナ禍の中之島公園には、賑わいとはちがった、共同利用による人々の連帯が見えていた。

官民で獲得した水都大阪という美称

古今東西を問わず水辺は都市の基幹をなす空間だ。なかでも水都と呼ばれる都市の水辺は歴史的に特別な意味を持つ。近世大坂は人や物の集まる天下の台所として栄え、縦横にめぐらされた堀川が交通や交易だけでなく人々の交流の場となり、水辺の出来事が都市の営みそのものだった。

大阪の特徴は、それを「民」が支えていたことにある。防災や産業などの重要な役割を担う水辺は、多くの都市では「官」が司ってきた。しかし近世大坂で水辺を担ったのは町衆と呼ばれる「民」であった。当時の大坂には約二〇〇もの橋が架かっていたが、そのうち幕府が架けた公儀橋はわずかに一二と言われており、その他はすべて町衆が架けた町橋であったとされる。現在も中之島の水辺に立つ図書館や中央公会堂が財界からの寄附によって建てられたことは、近代になってもこの気概が継承されたことを物

語っている。

中之島は江戸時代後期に東端が埋め立てられ、民衆の遊観地として親しまれていた。周辺には蔵屋敷が並び、近世から大坂の中心地の一つであった。この地が公園に指定されたのは明治二十四年。さらに大正四年には拡張計画が可決され、現在の中之島公園の形状に土地が造成された。大正十年には新市庁舎も完成し、中之島は「官」によって大阪のシビックセンターとしての役割を担うようになる。中之島公園には噴水や花壇、音楽堂やテニスコートなどが設けられ、水面には多くのボートが浮かび、モダンな雰囲気が漂う場所であった。このような大阪は「東洋のベニス」と称され、憧憬の水都となった。

大大阪の公園計画

当時の大阪は周辺町村を編入して市域を拡大していき、大正十四年には面積・人口ともに東京を抜いて日本一の都市となり、大大阪と呼ばれた。紡績や鉄鋼などが盛んになると「東洋のベニス」は「東洋のマンチェスター」と呼ばれるようになり、水の都は煙の都ともなった。経済は大いに繁栄したが、一方で大量の地下水を汲み上げたことによる地盤沈下などの問題も露呈した。

こうして大阪は清濁併呑により発展をとげてきた。昭和六年には市民からの寄附によって大阪城が再建され、昭和十二年には新しい目抜き通りとしての御堂筋が完成する。近代の大阪では官民がそれぞれの役割を担いながら、現在まで受け継がれる「都市格」を築いた。昭和十四年に刊行された『公園緑地』の大阪特集号には、当時の理想の公園計画が著されている。建築家の片岡安は「少なくとも八万坪以上の有効面積を有する中央公園を中心として之を完備し、所謂ウォーターフロント・パークとして大阪市民の誇り得る水都の公園たらしめ、同時に此の中に市民が集合して、全大阪が歓呼の声を或は厳粛なる感謝の気持ちを以つて市民の祭事を行う大広場を築造し、国民精神総動員や愛都心宣揚の中心地たらしめたいと希望するのである」と述べている。

八万坪（約二六ヘクタール）は今の中之島公園の約二・五倍の面積である。これが実現していれば、大阪市民の誇り得る、愛都心を育む公園として、「水都の公園」はより魅力的なものになっていたに違いない。

しかし、このような大大阪時代の理想の緑地計画は実現されることはなかった。片岡が「国民精神総動員」を掲げることからも窺えるように、その後の公園は戦争へ向けて防空のための場へとその存在意義を大きく変えていった。

水都大阪を取り戻す都市再生プロジェクト

戦後、大阪の水辺は都市の中心ではなくなっていった。

人や物の交通の中心は水から陸に変わり、復興のために多くの堀が瓦礫で埋められた。かつて水の都と呼ばれた美しい水路網は悪臭が漂う排水路となり、都市の裏側となってしまった。そんな状況が大きく変わりだすきっかけは、二〇〇一年に都市再生プロジェクト「水都大阪の再生」が採択されたことによる。大阪府・大阪市・大阪経済界の三者による官民連携の取り組みが推進され、二〇〇三年に策定された「水の都大阪再生構想」では都心部をロの字に囲む「水の回廊」が重点エリアに位置づけられた。

大阪都心部で水面を望むことのできる公共空間のうちの約四割と、河川空間にもまして最も高い割合を占めるのが都市公園である。中之島公園から南天満公園、桜之宮公園にかけての大川沿いに特に集中している。これらの多くが戦前に整備されたものであり、近年の都市再生で新しく生み出された公園はほとんどない。河川敷地占用許可準則が改訂された二〇一一年以降は、「北浜テラス」のような民間による独自の親水空間が創出され、断絶していた水辺の回遊性を線的につなぐ試みが進んでいる。しかし、堤内地の整備を伴う面的な水辺再生が実現した近年の事例は、「湊町リバープレイス」や「ほたるまち」など数十年も前から計画が進められてきたものが数える程度で、河岸だけでなく後背地を含めた抜本的な水辺空間の再編の難しさが表れており、都市化が進展した時代には水辺に公園をつくることは容易でないことがわかる。

一方で、すでにある公園の価値を高める取り組みも重要である。二〇〇六年には、大阪市によって中之島公園再整備のコンペが実施され、「水都大阪２００９」にあわせてリニューアルされた。それ以前の中之島公園は都心に取り残されたエアポケットならぬリバーポケットのような空白地帯で、ブルーシートのテントが並び、市民の足が向かうことのない場所だった。再整備によって往時から名所として根付いていたバラ園は美しく生まれ変わり、芝生広場には南北の河川を伸びやかにつなぐ起伏が施され、腰をおろ

再整備前の中之島公園
（提供：株式会社現代ランドスケープ）

再整備後の中之島公園

すとどこからでも水面が望めるようになった。島という土地のポテンシャルを活かすことで、いまでは市民が日常的に使いこなす場所として定着している。

水都大阪2009のスペクタクル

中之島公園をはじめとするこのような水辺空間の価値を市民に印象づけたのが、水都大阪再生のシンボルイベント「水都大阪2009」であった。水の回廊の各所でアートプログラムやワークショップが展開され、再整備が進んだ水辺を市民が楽しむ多彩なプログラムが実施された。地元の活動団体を中心とした市民参画の手法が導入され、官民のパートナーシップで進めていくプロセスが確立された。これまで官主導で進められてきたハード整備がそれだけで完結するのではなく、民の意向が水辺の再生に盛り込まれ、継続的なマネジメント体制の礎が築かれた。

このような官民のパートナーシップが展開できた背景には、それ以前からの民による独自の活動の蓄積があったことが大きい。筏を浮かべてお花見をする、橋上をライブ会場に見立てるといった水辺での活動は、個人の思いに端を発するゲリラ的なものであったが、段階的な社会実験の導入や連携体制の構築を経て正式に位置付けられるようになり、水辺の個性が育っていった。これからの水都大阪における官の役割は、民が生み出す水辺の魅力を都市全体へと広げていくためのプランニングにあるだろう。

公園に現れる大阪の公徳心

そもそも誰が都市をマネジメントしているのか、その捉え方にも大阪ならではの歴史的な蓄積がある。終生大阪を愛し、大阪に暮らし続けた司馬遼太郎は大阪を「日本におけるもっとも市民的な都市」だと述べている。まちは誰かにつくってもらうものではなく、自分たちがつくっていくものだという気概がこのまちにはある。様々な個性がぶつかり合い、響き合うことを是としている。だから大阪人は大阪のまちを身近に感じるとともに、自負も持っている。とくに公園は市民の公徳心を最もよく表す場所の一つである。公園のパブリックライフには人とまちの信頼関係が現れている。そこには、自由な活動を受け入れてくれる包容力が備わっている。大阪のまちは、人の魅力が場所の個性に映し出されている。規律や制限でまちの秩序を保つことよりは、なにか面白い、他にはない、新しいものに出会えるまちを大阪人は期待している。大阪のまちは、そんなコミュニケーションのための場としてある。

今夏、東横堀川に沿った公園にオープンする「β（ベータ）本町橋」はそんな大阪の自由で親密な民の気風を感じる施設になりそうだ。単なる飲食や舟運のための施設にとどまらず、公園に立地するという社会的な価値を深く理解した事

業展開が目指されている。高速道路が上空を覆い、これまであまり目が向けられることのなかった水辺を舞台に、民の多彩なプログラムによって、水辺とまち、人と場所をつなぐ新しいコミュニケーションが生まれようとしている。

「水と緑の都」大阪へ

このように水都大阪の魅力は、民の取り組みを官が支えながら大きく展開してきた。大阪出身の作家、柴崎友香は「大阪はつながっていく」と題したエッセイのなかで、大阪のまちの魅力を次のように述べている。「一極集中や経済の停滞など厳しい環境が続いているが、いきなり『東洋のマンチェスター』と大きく打って出た大阪の人の柔軟さはまだ健在だ。現代は当時のようにがむしゃらに規模を拡大するのではなく、街だとか国だとかいう枠を超えて、フラットにいろんな人や場所とコミュニケーションを取れる、おもしろいことができる可能性がある街だと、わたしは思っている」。まちの魅力をつくるのは、直接的にも間接的にも人である。はじめて訪れるまちの魅力は、そこで出会う食事やお土産物を通してつくられる印象にもまして、そこで接した人とのコミュニケーションによって大きく左右される。大阪人は自らの楽しみとして、フラットにいろんな人や場所とコミュニケーションを取ることに長けている。都市のプランニングとは人が都市の魅力をつくることに対する直接・間接の継続的な支援に他ならない。まちの側が人の気風を受け入れて、まちのイメージに反映させることができるかどうかが大切だ。人ばかりが主張するのではなく、まちばかりが目立つのでもない。水都大阪の魅力は、人とまちがひとつながりになって形成されているのである。

水都大阪 2009 の光景

公園は昔も今もそのための大切な場所である。官民が築いてきた水の都としての歴史において公園が果たした役割は、これまでにもまして大きくなる可能性を持っている。水の回廊に緑が相まってネットワークを広げることで、市民のより自由で闊達な活動がつながっていくだろう。「水と緑の都」へ向けて、これからも大阪はますます人とまちとのコミュニケーションを深めていくと信じている。